

令和7年度 国東市：全国学力・学習状況調査結果（小学校：国語）

1 結果のポイント

- 平均正答率は、全国平均と県平均を上回った。

	国東市	大分県	全国
平均正答率	70.0	69.0	66.8

<観点別正答率>

観点	国東市	大分県	全国
知識・技能	80.6	78.5	74.5
思考・判断・表現	66.4	64.9	63.8

- 「知識・技能」「思考・判断・表現」ともに平均正答率は全国平均と県平均を上回った。

<領域別正答率>

領域	国東市	大分県	全国
話すこと・聞くこと	66.2	65.8	66.3
書くこと	70.9	70.6	69.5
読むこと	63.2	59.8	57.5

- 「話すこと・聞くこと」は平均正答率が県平均は上回ったが、全校平均を0.1ポイント下回った。
- 「書くこと」「読むこと」は平均正答率が全国平均と県平均を上回った。

2 課題が見られた問題と指導の改善事項

(1) 情報の扱い方に関する事項〔1〕二

- 出題のねらい：情報と情報との関係づけの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うことができるかどうかを見る。
- 問題の概要：【話し合いの記録】の書き表し方を説明したものとして適切なものを選択する。
- 正答率：国東市 59.4%・大分県 63.4%・全国 63.1%
- 学習指導にあたって
 - 図などによる語句と語句との関係の表し方とは、複数の語句を丸や四角で囲んだり、語句と語句を線でつないだりするなど、図示することによって情報を整理することである。図示などにより、語句と語句との関係を表すことを通して、考えをより明確なものにしたり、思考をまとめたりすることができることを理解し、様々な学習活動において活用できるようにすることが求められる。
 - 目的や意図に沿って、線や囲みなど図示することによって自分なりに情報を整理できるようにすることが重要である。また、第5学年及び第6学年の〔思考力、判断力、表現力等〕の「A 話すこと・聞くこと」の(1)「A目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討すること。」との関連を図り、指導の効果を高めることが考えられる。情報の整理の仕方については、様々な方法があり、年間を通じて複数回、意図的に指導することも大切である。

(2) 読むこと〔3〕三(1)

- 出題のねらい：目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることができるかどうかをみる。
- 問題の概要：【話し合いの様子】の田中さんの発言の空欄 A に当てはまる内容として適切なものを選択する。

□正答率 : 国東市 34.6%・大分県 39.8%・全国 40.8%

□学習指導にあたって

- ・「必要な情報を見付ける」とは、文章の中から、目的に応じて必要な情報を取捨選択したり、整理したり、再構成したりすることである。実生活において、児童は、図表を含む様々な情報に触れている。その中から、必要な情報を見付けるためには、文章と図表などの情報を合わせて読んだり、複数の資料を関連付けて読んだりすることが大切である。
- ・文章中に用いられている図表などが文章のどの部分と結び付くのかを明らかにしたり、文章と図表などの関係を捉えて読んだりすることで、内容についてより深く理解したり解釈したりすることができるよう指導することが大切である。その際、図表からも必要な情報を見付けたり、見付けた情報を言葉に表したりすることが求められる。

3 指導の改善のポイント

(1) 国語科の授業づくりの流れに沿って単元を構想する。

- ①単元で取り上げる指導事項を明確にする。
- ②資質・能力の育成に適した言語活動を設定する。
- ③資質・能力の定着を確認する適切な評価基準を設定する。
- ④単元の指導と評価の計画を立てる。
- ⑤支援を要する児童に対する手立ての工夫を考える。

①単元で取り上げる指導事項を明確にする

つきたい力を明確にするためには学習指導要領解説の「内容」に書かれていることを確認するとよい。学習指導要領に示された内容は一つの指導事項に複数の指導する内容が含まれているため、それぞれの単元で指導しなかった内容については該当学年の別の単元でもれなく指導する必要がある。その際、マトリクス型年間指導計画を活用するとよい。

②資質・能力の育成に適した言語活動を設定する。

国語科における言語活動とは「話すこと・聞くこと」や「書くこと」「読むこと」に関する基本的な国語の力を定着させるため、言葉によって理解し思考し表現するという過程を経る活動である。言語活動は手立てであり大事なものは「資質・能力」の育成である。指導事項（目標）と言語活動（手立て）を往還させ、つきたい力に最適な言語活動の設定をすることが大切である。身につける言葉の力を想定して指導者がやってみる（モデルを作成してみる）ことで子どもの実態にあっているかを確認したり子どものつまずきを想定したりすることも大切である。

③資質・能力の定着を確認する適切な評価基準を設定する。

単元の評価基準を設定した後、実際の学習活動を踏まえて各時間の「概ね満足できる状況」（Bの児童の姿）を具体的に想定しておく。

④単元の指導と評価の計画を立てる。

各時間の具体的な学習活動及び単元のどの段階でどのような評価基準に基づいて評価するのかを明らかにする。

⑤支援を要する児童に対する手立ての工夫を考える。

質問調査「国語の授業の内容はよく分かりますか」を見ると「当てはまらない」「どちらかといえば、当てはまらない」と回答した児童が11.9%いる。一人ひとりの困りを想定して、支援方法を考えることが大切である。

(2) 系統的な指導を意識する。

これまでに身につけてきた資質・能力を把握した上で、単元で育成を目指す資質・能力を明確にすることが大切である。つまり、前学年の（または前単元の）指導内容を受けて何を新たに身につけさせるのかを明確にして指導することが大切である。

(3) 学習用語を確実に理解させる。

必要な言葉を使用し、言葉で思考を深めることが必要である。そのために、小学校で使用する教科書に掲載されている学習用語は、その学年で確実に理解させることが大切である。既習の用語は授業で使わせ、

指導者が曖昧な言葉を使わないようにしなければならない。

4 教科を越えて取り組むべきこと

(1) 漢字や語句、文法、表現技法等の習得

漢字や語句、文法等の確実な習得には、繰り返し練習が不可欠である。特に漢字は一度覚えても使わなければ忘れてしまう。繰り返し学習できる環境を学校全体で整えることが大切である。また、国語科以外の教科の時間に既習の漢字を使用するように指導することも大切である。

(2) 読書や各教科における学校図書館の活用

- ・様々な力を下支えするものとして活字に親しむことが必要である。特に、SNSを使うことで自分に適した情報が短い言葉で出てくる経験をしている児童が増えていることが考えられることから、学校司書等と連携しバランスのよい読書指導をすることが重要である。
- ・学年が上がるに従って、本だけでなく、新聞、インターネット、テレビ、ラジオ等の様々な情報を活用することも求められる。質問調査からは新聞を読む頻度が少ない実態が明らかになっている。学校図書館にある新聞の活用を積極的に行ったり、新聞を児童の見えるところに掲示し、自然と情報が入ってくる環境を作ったりしていきたい。

(3) 全国学力・学習状況調査についての研修や情報共有

全国調査の結果分析を各学校の指導の充実に活かすために、学校全体で情報を共有し、授業改善のベクトルを揃えることが重要である。

◆参考資料：「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料

未来を創る学力向上支援事業に係る未来を創る授業力向上協議会資料（R5・R6年度）